



Martyn BRABBINS

Conductor

© Benjamin Ealovega

指揮 マーティン・ブラビンズ

イングリッシュ・ナショナル・オペラ音楽監督。ロンドンで作曲を学び、レニングラード（現サンクトペテルブルク）でイリヤ・ムーシンに指揮を師事。1988年リーズ指揮者コンクールで優勝。ロイヤル・フレーミッシュ・フィル首席客演指揮者、名古屋フィル常任指揮者などを歴任。これまでにロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン響などを指揮。ミラノ・スカラ座やバイエルン州立歌劇場へデビューを果たした。都響とは2009年以降たびたび共演、2014年の英国音楽特集も好評を博した。

Martyn Brabbins is Music Director of English National Opera. He won the 1st prize at the 1988 Leeds Conductors' Competition. Brabbins was formerly Principal Guest Conductor of Royal Flemish Philharmonic and Chief Conductor of Nagoya Philharmonic. He has appeared with Royal Concertgebouw Orchestra and London Symphony, and has made his debut at Teatro alla Scala (Milano) and Bayerische Staatsoper.

B
Series

第831回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.831 B Series

東京オペラシティ コンサートホール

2017年5月16日(火) 19:00開演

Tue. 16 May 2017, 19:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

指揮 ● マーティン・ブラビンズ Martyn BRABBINS, Conductor

ピアノ ● スティーヴン・オズボーン Steven OSBORNE, Piano

コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

バターワース：青柳の堤 (6分)

Butterworth: The Banks of Green Willow

ティペット：ピアノ協奏曲 (1955) (日本初演) (32分)

Tippett: Piano Concerto (1955) (Japan Premiere)

I Allegro non troppo

II Molto lento e tranquillo

III Vivace

休憩 / Intermission (20分)

ヴォーン・ウィリアムズ：

ロンドン交響曲(交響曲第2番) (1920年版) (49分)

Vaughn Williams: A London Symphony (Symphony No.2) (1920 version)

I Lento - Allegro risoluto

II Lento

III Scherzo (Nocturne). Allegro vivace

IV Andante con moto - Maestoso alla marcia (quasi lento) -

Epilogue. Andante sostenuto

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

シリーズ支援：明治安田生命

助成：文化庁文化芸術振興費補助金

(舞台芸術創造活動活性化事業)



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。

写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Piano

Steven OSBORNE

ピアノ

スティーヴン・オズボーン

©Benjamin Ealovega



1971年スコットランド生まれ。1991年クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクール、また1997年ナウムバーグ国際ピアノ・コンクールで優勝。フィルハーモニア管、BBCフィル、ザルツブルク・モーツアルテウム管、バーミンガム市響、N響、ミュンヘン・フィル、ロンドン・フィルなどに招かれ、ドホナーニ、ギルバート、アシュケナージ、カム、ジャッド、アルミンク、スヴェトラーノフらの著名指揮者と共に演奏。2009年と2013年にグラモフォン賞を受賞。2015年都響ヨーロッパ・ツアーではストックホルム公演で共演した。

Steven Osborne is one of Britain's most highly regarded pianist. His numerous and prestigious prizes include the winning at Concours International de Piano Clara Haskil (1991), Naumburg International Piano Competition (1997), and Gramophone Awards (2009 & 2013). He has performed with orchestras such as Philharmonia Orchestra, Mozarteumorchester Salzburg, and London Philharmonic under the batons of Dohnányi, Gilbert, and Ashkenazy, among others.

バターワース： 青柳の堤

ジョージ・バターワース (1885~1916) は青年期に第1次世界大戦に遭遇した、いわゆる「失われた世代」に属する作曲家である。事実、出征したバターワースは1916年夏のソンム会戦で31歳の若さで戦死した。

法律家の父と元ソプラノ歌手の母との間にロンドンのパディントンで生まれたバターワースは、当時の上流中産階級の子弟の例にもれず、名門パブリック・スクールのイートン校からオックスフォード大学へ進み、父親からは法律家の道に進むことを期待されていた。しかし、大学時代にレイフ・ヴォーン・ウィリアムズ (1872~1958/以下RVWと略) の知己を得て本格的に音楽の道に転じた。著名な民謡研究家のセシル・シャープ (1859~1924)、RVW、ギュスター・ホルスト (1874~1934)らと共に民謡の収集保存と研究に勤しみ、イングランド民謡のイディオムを作曲に活かすことに熱心であった。

また、バターワースはモリス・ダンスという14世紀に起源を有するイングランドの伝統舞踊の名手でもあった。若干の歌曲、小オーケストラのための《2つの牧歌》、《青柳の堤》、《シュロップシャーの若者》程度しか作品が残っておらず、戦争による夭折が惜しまれてならない。

《青柳の堤》ではバターワースが収集した2曲の民謡の旋律が使用されている。冒頭の旋律は「青柳の堤」というバラードである。やがてバターワース自身が作った旋律がホルンに現れ、テンポを上げて「青柳の堤」が展開される。続く後半では「緑の茂み」という民謡の旋律をオーボエ、ついでフルートとハープが奏する。牧歌的な曲調だが、素材となったバラードは船乗りに恋した農村の娘が駆け落ちして赤ん坊を産み、死を遂げる切ない物語である。

イングランド北西部の町ウェストカービーでの初演から3週間後のロンドン初演 (3月20日) は、バターワースが自作を聴いた最後の機会となった。

(等松春夫)

作曲年代：1913年

初 演：1914年2月27日 ウエストカービー エイドリアン・ポールト指揮
ハレ管弦楽団とリヴァプール・フィルハーモニック管弦楽団の選抜メンバー

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペッタ、ハープ、弦楽5部

ティペット： ピアノ協奏曲 (1955)

マイケル・ティペット (1905~98) はウィリアム・ウォルトン (1902~83) とほぼ同じ、ベンジャミン・ブリテン (1913~76) よりもやや前の世代の英国の作曲家である。3歳年長のウォルトンと8歳年少のブリテンが早熟の天才とすれば、ティペットは大器晩成であった。

1998年に93歳で没したティペットはレイフ・ヴォーン・ウィリアムズ (1872~1958) に代わる英国音楽界の「老人」と崇められたが、晩年まで清冽かつ実験精神に溢れていた作風からはむしろ「永遠の青年」と呼ぶにふさわしい。4つの交響曲、各種の協奏曲、室内楽、器楽曲、5つのオペラ、多数の声楽曲があり、中でも反戦メッセージを込めたオラトリオ《我らの時代の子》(1942) と、モーツアルトの『魔笛』を下敷きにした寓話オペラ『真夏の結婚』(1955) がよく知られている。

1950年、英国公演に来たドイツの名ピアニスト、ヴァルター・ギーゼキング (1895~1956) が弾くベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番のリハーサルを聴いて感銘を受けたティペットは、ピアノ協奏曲作曲への意欲を掻き立てられた。折よく1953年にバーミンガム市交響楽団のための新作を委嘱され、これがティペット唯一のピアノ協奏曲となった。全曲の半分を占める長めの第1楽章、短い緩徐楽章と終楽章はベートーヴェンの協奏曲第4番に範をとっている。また音楽的素材には同時期のオペラ『真夏の結婚』と共に通するものが多い。全曲にわたってピアノはあまり前面に出ることなく、管弦楽との一体感が強い。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ 自由なソナタ形式。冒頭の第1主題はピアノと第1フルートの二重奏のように始まる。管弦楽によるクライマックスを経て、第2フルートが吹く凝ったリズムによる同音反復(第1主題が並走)が第2主題。色彩豊かな展開部を経て、チェレスタの神秘的な響きが再現部を導く。カデンツァにチェレスタが参加するのが興味深い。

第2楽章 モルト・レント・エ・トランクイロ ほぼ3つの部分から成る。ファゴットとホルンによる短い序奏に続く第1部は、フルートとクラリネットによるカノン。第2部でカノンは第3と第4ホルン、そしてオーボエとファゴットに引き継がれ、ピアノはここまで一貫して装飾的な音型を奏でる。第3部では、この楽章で初めてヴァイオリンとヴィオラが参入、ピアノと情熱的な対話を交わす。

第3楽章 ヴィヴァーチェ 変則的なロンドで、図式を示すとA-B-A-C-A-D-A-Bとなる。Aは生気に満ちた管弦楽のトゥッティでシンコペーションが効果的。Bでピアノが入りジャズ的な躍動を示す。Cでは金管が息の長い旋律を豪快に吹き、Dは一転してピアノを中心とした静謐な場面となる。最後のBはコーダを兼ね、ハ長調の明るい響きで全曲を閉じる。

(等松春夫)

作曲年代：1953～55年

初 演：1956年10月30日 バーミンガム ルイス・ケントナー独奏
ルドルフ・シュヴァルツ指揮 バーミンガム市交響楽団

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、
ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、チェレスタ、弦楽5部、
独奏ピアノ

ヴォーン・ウィリアムズ： ロンドン交響曲（交響曲第2番）（1920年版）

レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ（1872～1958／以下RVWと略）は1910年に《海の交響曲》（後に交響曲第1番の番号を付される）を完成させた。しかし、独唱や合唱を伴う《海の交響曲》は、交響曲というよりも実態は大規模なオラトリオであった。

その意味で、純粹器楽作品としてのRVWの最初の交響曲は、後に交響曲第2番とされた《ロンドン交響曲》である。民謡研究と共に、『音楽における英国的なもの』を探求する同志でもあった年少の親友ジョージ・バターワース（1885～1916）の熱心な働きかけが作曲を進める動機となった。全曲いたるところに郷土色豊かな民謡調の旋律がちりばめられているのは、英国全土から人々が流れ込むのが帝都ロンドンである、とのRVWのユーモアであろう。

RVW自身はロンドンの出身ではないが、成人してからの大部分の時間をロンドンで過ごし、ロンドンっ子であると自任していた。《ロンドン交響曲》はエドワード時代（1901～1910）の大都会ロンドンが見せるさまざまな相貌とそれから喚起される想いを音楽化したものである。

1910年にロンドンを訪問したRVWと同世代の日本のジャーナリスト、長谷川如是閑（1875～1969）は隨筆『倫敦！倫敦？』（1912年刊）において「倫敦の霧のうちに、樂人の空想から發するハーモニーとメロディーとを有つて空に漂っている」

（霧のエンパンクメント）、「人及び物から發し得る限りの音響が押し合いヘシ合う街頭の雜音も、ビッグ・ベンの声と共に和諧なき諧音を以て絶えざる樂を奏する倫敦コンサートに化するのである」（美妙なるビッグ・ベン）と記しているが、まさにこれがRVWの描いたロンドンであった。

しかし後年、RVWは作品が情景描写の標題音楽のように語られることを好まず、むしろ「ロンドンっ子が書いた交響曲」（A symphony by a Londoner）と考えてほしいと述べている。

第1楽章 レント～アレグロ・リズルート ソナタ形式。序奏では弦楽器が弱音で朝靄にかかるテムズ川を描き、やがて川に臨む国会議事堂の時計塔ビッグ・ベンの時報の鐘がハープで奏される。音楽は一転してトゥッティのアレグロとなり、大都会ロンドンの喧騒に満ちた一日が始まる。展開部後半のノスタルジックな弦楽八重奏とハープの対話を経て、再現部は静かに始まり、やがてfffの終結に至る。

第2楽章 レント RVWが「ブルームズベリー広場の11月の午後」と表現した鬱然として夢幻的な緩徐楽章。ヴィオラ独奏で始まる中間部では木管楽器の鳥のさえずりと、弦楽器の対話が続く。ブルームズベリー広場は、大英博物館やロンドン大学本部のある閑静な文教地区である。

第3楽章 スケルツォ(夜想曲)／アレグロ・ヴィヴァーチェ RVWが「ウェストミンスターの河岸にて」と呼んだスケルツォで、2つのトリオをもつ。北岸の繁華街ストランドのざわめきと、南岸に広がる工場地帯の喧騒がテムズ川の水上で響きあう。

第4楽章 アンダンテ・コン・モード～マエストーネ・アラ・マルチア(クアジ・レント)～エピローグ／アンダンテ・ソステヌート 荘重な序奏に続き、RVWが「貧者の行進」と語った労働歌風で行進曲調の音楽が不穏な空気を醸し出す。殷賑を極める大英帝国の首都も一步裏に入れば貧富の差と社会不安が渦巻き、労働者と警官隊の衝突もしばしばあった。音楽が潮を引くように静まると再び第1楽章のビッグ・ベンの時報の鐘がハープで密やかに奏される。

続く幻想的な「エピローグ」はH.G.ウェルズ(1866～1946)の小説『トーノ・バンゲイ』に触発されたとRVW自身が語っている。小説の終わりでは、資本主義社会の浮沈をつぶさに経験した主人公が海軍技師となり、新型駆逐艦の試運転のためテムズ川を下りながらつぶやく。

「イングランド英蘭王国や大英帝国や、古い昔のロンドン矜りと古い信仰が滑るように過ぎていき、ロンドン水平線下に消えていく。河は流れ去り、倫敦は消え、イングランド英蘭は消えていく」

朝靄のテムズに始まったRVWの《ロンドン交響曲》もまた、夕暮れのテムズに溶け入るように終わる。

RVWは曲の改訂を重ね(細かく数えると6つの稿がある)、本日演奏されるのは、1920年版(1225小節)である。これは1913年の初稿(1322小節)と、最終稿とされる1933年版(1177小節)の中間にあたる。初稿に比べると、1920年版と1933年版は第2楽章と第4楽章が大幅に短縮された。交響曲としての形式感では1933年版の完成度が高いが、翳りのある味わい深いパッセージが多い初稿と、初稿のニュアンスをかなり残した1920年版も捨てがたい。

マーティン・プラビンズは1933年版の第4楽章で削除された部分が音楽的にあまりにも素晴らしいことと、第2楽章と第4楽章のバランスが良くなることを主な理由として1920年版を使用する。なおこの1920年版は、作曲の契機を作り、戦死したロンドン生まれの親友バターワースに献げられた。

(等松春夫)

作曲年代：1912～13年

初演：1914年3月27日 ロンドン

ジェフリー・トイ指揮 クイーンズ・ホール管弦楽団

楽器編成：フルート3(第2、第3はピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンバニ、グロッケンシュピール、タムタム、小太鼓、トライアングル、スレイベル、シンバル、大太鼓、サスペンデッドシンバル、ハープ2、弦楽5部



第832回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.832 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

2017年5月21日(日) 14:00開演

Sun. 21 May 2017, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● マーティン・ブラビンズ Martyn BRABBINS, Conductor

ヴァイオリン ● 三浦文彰 MIURA Fumiaki, Violin

ソプラノ ● 半田美和子 HANADA Miwako, Soprano *

女声合唱 ● 新国立劇場合唱団 * New National Theatre Chorus, Female Chorus *

合唱指揮 ● 富平恭平 TOMIHIRA Kyouhei, Chorus Master

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

エルガー：ヴァイオリン協奏曲 口短調 op.61 (50分)

Elgar: Violin Concerto in B minor, op.61

I Allegro

II Andante

III Allegro molto

休憩 / Intermission (20分)

ヴォーン・ウィリアムズ：南極交響曲(交響曲第7番)* (42分)

Vaughn Williams: Sinfonia Antartica (Symphony No.7) *

I Prelude. Andante maestoso

II Scherzo. Moderato

III Landscape. Lento

IV Intermezzo. Andante sostenuto

V Epilogue. Alla marcia, moderato (non troppo allegro)

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金

(舞台芸術創造活動活性化事業)



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演 (青少年を年間500名ご招待) 協賛企業・団体はP.45、募集はP.48をご覧ください。 

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。

写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

5/21 C Series

13

Violin

MIURA

Fumiaki

ヴァイオリン

三浦文彰

©Yuji Hori



2009年、世界最難関とも言われるハノーファー国際コンクールにおいて、史上最年少の16歳で優勝。これまでNDRエルプフィル（北ドイツ放送響）、SWRシュトゥットガルト放送響、プラハ・フィル、ワルシャワ・フィルなどと共に演、国際的な活動を展開している。2017年6月にロンドンでリサイタル・デビューを予定。使用楽器は、宗次コレクションより貸与されたストラディヴァリウス“Viotti”（1704年製）。

In 2009, at the age of 16, Fumiaki Miura became the youngest-ever winner of Joseph Joachim International Violin Competition Hannover. He has performed with NDR Elbphilharmonie Orchestra, Radio-Sinfonieorchester Stuttgart des SWR, Prague Philharmonia, and Warsaw Philharmonic, among others. Miura will make his recital debut in London in June 2017. He plays a 1704 Stradivarius “Viotti” generously on loan from Munetsugu Collection.

Soprano

HANDA

Miwako

ソプラノ

半田 美和子

©Akira Muto



桐朋学園大学、同大学研究科修了。二期会オペラスタジオ修了時に最優秀賞、川崎靜子賞を受賞。第4回藤沢オペラコンクール第1位、福永賞を受賞。その後ベルリンにて研鑽を積む。数々のオペラに出演。2016年には細川俊夫のオペラ『松風』（香港におけるアジア初演）のタイトル・ロールを好演。ソリストとしてはベルティーニ、インバルら著名指揮者と共に演を重ねる。精緻な技術と音楽性が高く評価されている日本を代表するソプラノ。

Miwako Handa graduated from Toho Gakuen College and completed graduate course of the same college. She won the 1st Prize and Fukunaga Prize at the 4th Fujisawa Opera Competition. She then continued her studies in Berlin. Handa has appeared in many operas. In 2016, she gave an outstanding performance in the title role of *Matsukaze*, composed by Toshio Hosokawa in the opera's Asian premiere (Hong Kong).



female Chorus

New National Theatre Chorus

女声合唱 新国立劇場合唱団

© 梶田力丸

新国立劇場は、オペラ、バレエ、コンテンポラリーダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として、1997年10月に開場した。新国立劇場合唱団も年間を通じて行われる数多くのオペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始。個々のメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家・スタッフはもとより、国内外のメディアからも高い評価を得ている。

New National Theatre, Tokyo, opened in October 1997 as the only national theatre for the modern performing arts of Opera, Ballet, Contemporary Dance and Play. Meanwhile, New National Theatre Chorus started its career and has played a central role in many Opera performances all through the seasons. Their ensemble ability and rich voices have achieved acclaim from co-starred singers, conductors, directors, stage staffs as well as domestic and foreign media.

合唱指揮 富平恭平

東京藝術大学卒業。指揮を高閑健、田中良和、小田野宏之の各氏に師事。これまでに群響、東京シティ・フィルなどを指揮。オペラでは新国立劇場、東京二期会、藤原歌劇団などの公演で副指揮者、合唱指揮者などを務めている。2010年8月から新国立劇場音楽スタッフ。

Kyouhei Tomihira graduated from Tokyo University of the Arts. He has conducted orchestras such as Gunma Symphony and Tokyo City Philharmonic. He also serves as Associate Conductor and Chorus Master in opera performances of New National Theatre, Tokyo, Tokyo Nikikai Opera Foundation and The Fujiwara Opera. He is a member of the music staff of New National Theatre, Tokyo.

エルガー： ヴァイオリン協奏曲 口短調 op.61

エドワード・エルガー (1857~1934) 唯一のヴァイオリン協奏曲は、オーケストラの規模の大きさ、演奏時間の長さ、独奏者に要求される技量の高さでベートーヴェンやブラームスの協奏曲に比肩する大曲である。超絶技巧の誇示よりもオーケストラと独奏楽器の親密な対話がこの曲の本質であり、「ヴァイオリン独奏付の交響曲」とも言えよう。事実、交響曲第1番 (1908年) と第2番 (1911年) の間に書かれたこの曲は、エルガーの創作の最円熟期に属する。

オーストリア出身の大ヴァイオリニスト、フリツ・クライスラー (1875~1962) はエルガーを「現存する最高の作曲家」と評し、自分のために協奏曲を書いてくれることを期待していると再三、新聞や雑誌のインタビューで語っていた。これを知って感動したエルガーはクライスラーと会見し、1909年から10年にかけてクライスラー本人や友人でロンドン交響楽団のリーダー (コンサートマスター) であったウィリアム・リード (1876~1942) の助言を得ながらヴァイオリン協奏曲の作曲に打ち込んだ。

無名時代のエルガーはヴァイオリンの教師として糊口をしのぎ、一時はヴィルトソ・ヴァイオリニストになることを夢見て、ロンドンでハンガリー出身の著名なヴァイオリニスト、アドルフ・ポリツァー (1832~1900) に師事したが、結局ソリストの道は断念した。しかしその後もこの楽器へのこだわりは強く、クライスラーとの出会いがエルガーの協奏曲の創作欲に火をつけたのである。

ヴァイオリン協奏曲にはまた、エルガーのもっとも個人的な強い想いも込められていた。この曲のスコアの表紙には「Aqui está encerrada el alma de..... (ここには.....の魂が封じ込められている)」というスペイン語の短い一文が記されている。5つの伏せ字に誰の名前が入るかについては、エルガーの愛妻アリス (1848~1920)、初恋のひとヘレン・ウィーバー (1860~1927)、エルガー夫妻が親しくしていた米国婦人ジュリア・ワージントン (1856~1913)、フリツ・クライスラーなど何人もの候補がある。

しかし、伏せ字はアリス・スチュワート=ワートリー (1862~1936) という才色兼備の女性をさす可能性が高い。9歳年長の夫人と同名のアリスを区別して、エルガーは5歳年少の彼女を「ウインドフラワー (アネモネ)」の愛称で呼んでいた。「オフィーリア」などで知られるラファエル前派の画家ジョン・エヴァレット・ミレー (1829~96) の娘で、保守党議員の男爵の後妻であった。エルガー夫妻とスチュワート=ワートリー夫妻の交流の中で、ウインドフラワーのアリスはエルガーの音楽の最高の理解者となっていく。

ヴァイオリン協奏曲の作曲中にエルガーとウインドフラワーの間には頻繁な手紙のやりとりがあり、その中でエルガーがこの曲を「貴女の協奏曲」や「われわれの協奏曲」と呼んでいることからも、彼女がこの曲のミューズであることはほぼ間違いない。しかし、ふたりの間に恋愛感情があったかは定かではない。ウインドフラワーはエルガー夫人アリス公認のミューズであり、愛妻家のエルガーが道を踏み外した形跡もないが、この曲にはやるせないまでの憧れの想いが充ち溢れている。ちなみに1934年エルガーの葬儀における弔辞で「イングランドの音楽におけるシェイクスピア」と作曲者を讃えたのはウインドフラワーのアリスであった。

初演は作品を献呈したクライスラーが行ったが録音はなく、1932年にエルガー自身の指揮でこの曲が録音されたときには弱冠16歳のユーディ・メニューイン(1916~99)が独奏者に起用された。

第1楽章 アレグロ ソナタ形式。オーケストラによる重々しい威厳のある提示部で始まり、6つの関連した主題が次々と紹介される。第2提示部で第1主題が途中までオーケストラで奏されると、続きを引き取るように「ノビルメンテ」(高貴に)と指定された独奏ヴァイオリンが参入する。独奏ヴァイオリンが残りの5つの主題を次々に弾いていく中、特にいとおしむように歌われるのはエルガーが「ウインドフラワー」と名付けた第2主題である。緻密な展開部を経て、堂々たるトゥッティで締め括られる。

第2楽章 アンダンテ 三部形式。オーケストラによる瞑想的な短い前奏に続き、独奏ヴァイオリンが静々と歌う。中間部では独奏ヴァイオリンの後を追って、木管がつぶやく。

第3楽章 アレグロ・モルト ソナタ形式。演奏時間の4割がカデンツアという異形の楽章である。ゆらぐような弦楽器と上昇する独奏ヴァイオリンの掛け合いで始まる。トゥッティで登場する活発な第1主題と独奏ヴァイオリンが提示する優美な第2主題から成る。充実した主部の高潮がおさまると、霧雨のようなピチカート・トレモロを背景にして独奏ヴァイオリンが長大なカデンツアを奏し、先行する楽章の諸主題を次々と回想していく。

この箇所をエルガーは「エオリアン・ハープの響きのように」演奏するようにと指示している。これはギリシャ神話の風の神アイオリスに由来し、自然の風を受けて鳴る楽器である。ピチカート・トレモロとはエルガーが考案した新技法であり、複数の指の柔らかい部分で弦をはじくトレモロは、ざわざわとそよぐ風を想起させる。この曲のミューズとなった佳人の愛称「ウインドフラワー=風の花」につながる、憧れとノスタルジーに満ちたカデンツアである。

それが終わると再び第1楽章冒頭の主題がオーケストラで奏されるが、長調に転じ

て独奏ヴァイオリンと競争するようにして輝かしいコーダとなる。

(等松春夫)

作曲年代：1908～10年

初 演：1910年11月10日 ロンドン フリツ・クライスラー独奏
作曲者指揮 ロイヤル・フィルハーモニック協会の管弦楽団（実体はロンドン交響楽団）

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンバニ、弦楽5部

ヴォーン・ウィリアムズ： 南極交響曲（交響曲第7番）

地球上に残された最後の秘境、南極大陸。20世紀初め各国は威信をかけて南極点への一番乗りに鎧を削った。^{しのぎ}1911年から12年にかけて、英國のスコット隊、ノルウェーのアムンセン隊、日本の白瀬隊がほぼ同時期に南極点征服に挑んだ。結局、南極点初到達の栄冠はアムンセン隊に輝き、白瀬隊は壮図半ばで引き返すも全員が生還した。それに対し、スコット隊はアムンセン隊に次いで南極点到達に成功はしたもの、帰途に猛吹雪に巻きこまれて全滅の悲運に遭う。

1948年に公開されたジョン・ミルズ主演の英國映画『南極のスコット』は、ロバート・スコット海軍大佐（1868～1912）率いる英國隊のこの悲劇を描いた作品である。音楽を担当したのはレイフ・ヴォーン・ウィリアムズ（1872～1958／以下RVWと略）であったが、実は作曲した音楽の半分しか映画には使用されなかった。映画は1949年にプラハ映画祭で音楽賞を受賞し、これに励まされたRVWは、未使用だったものも含め映画のために書いた音楽を素材に1949年から52年にかけて『南極交響曲』を作曲し、後に交響曲第7番とした。

多彩な打楽器、オルガン、ウインドマシーン、さらにヴォカリーズのソプラノ独唱と女声合唱を加えた5楽章から成る大作で、「自然の猛威に対峙する人間」を描いた長大な事実上の連作交響詩という点で、リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）の『アルプス交響曲』と双璧である。しかし、たんなる自然描写ではなく、神々に挑戦したプロメテウスのごとく、圧倒的な存在に挑む人間の不屈の精神をも表現している。なお、各楽章の冒頭には「エピグラフ（題辞）」として詩、旧約聖書の詩編、スコットの日記からの引用が掲げられており（P.20参照）、演奏に際して朗読されることもある。

第1楽章 前奏曲 アンダンテ・マエストーレ 陰鬱な響きで始まり、寒々とした

オーケストラの調べの上にウインドマシーンとヴォカリーズのソプラノ独唱、さらには女声合唱が重なり、神秘的なオーロラや氷山が現出する。やがて金管によるファンファーレが高らかに響き、遠征の開始を告げる決然としたコーダとなる。

第2楽章 スケルツオ モデラート スコット隊を乗せたテラ・ノヴァ号は南氷洋を進み、クジラに遭遇する。南極大陸に上陸して基地の設営に奮闘する隊員たちの活気と、それを物珍しげに眺めに来るペンギンたちのユーモラスな姿が、チエレスタやグロッケンシュピールを交えて描かれる。

第3楽章 風景 レント 全曲中もっとも長い楽章で、重たいソリを引きずりながら氷原を進む一行の苦闘が続く。幻想的なオーロラの輝き。クライマックスではオルガンの荘厳な調べと金管の重奏によって大自然の脅威に直面した人間の感動と無力感が描かれる。切れ目なしに第4楽章へ続く。

第4楽章 間奏曲 アンダンテ・ソステヌート ハープとオーボエに導かれ、独奏ヴァイオリンを伴うオーケストラによる牧歌的な旋律がスコットたちのしばしの休息を描く。コーダの前で第1楽章冒頭の主題が回想され、最終段階に達した南極点征服への新たな決意を思わせる。

第5楽章 エピローグ アラ・マルチア・モデラート (ノン・トロッポ・アレグロ) トランペットのファンファーレに続いて、第1楽章冒頭の主題が木管を中心に戻り、ティンパニをはじめとする打楽器が白い死の世界を暗示する。衰弱した一隊員は、仲間の足手纏い^{まと}になることを嫌い、自らテントを出て猛吹雪の中に消えていく。哀切極まるファゴットのソロが死を覚悟した人間の苦しみと、それを傍観せざるを得ない仲間たちの苦悩を描き出す。非命に斃れたスコットらの不撓不屈の精神を讃えるかのような悲壮なファンファーレと行進曲が静まると、第1楽章冒頭の凝縮された再現を迎える。女声合唱とソプラノ独唱のヴォカリーズ、そしてウインドマシーンの吹雪による挽歌が全曲を結ぶ。

(等松春夫)

作曲年代：1949～52年（映画音楽は1947年に完成）

初 演：1953年1月14日 マンチェスター ジョン・バルビローリ指揮
ハレ管弦楽団・女声合唱団 マーガレット・リッチャー独唱

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シロフォン、ヴィブラフォン、小太鼓、テナードラム、グロッケンシュピール、ウインドマシーン、シンバル、ゴング、大太鼓、トライアングル、サスペンデッドシンバル、鐘、ハープ、ピアノ、チエレスタ、オルガン、弦楽5部、ソプラノ独唱、女声三部合唱

ヴォーン・ウィリアムズ：南極交響曲（交響曲第7番） エピグラフ

I Prelude

To suffer woes which Hope thinks infinite;
To forgive wrongs darker than death or night;
To defy Power, which seems omnipotent...
Neither to change, nor falter, nor repent;
This... is to be
Good, great and joyous,
beautiful and free;
This is alone Life, Joy,
Empire and Victory.

Shelley: *Prometheus Unbound*

第1楽章 前奏曲

希望が無限なように思われる苦難を耐え忍ぶこと。
死や夜よりも暗い悪を赦すこと。
かわらず、ひるまず、悔うことなく、
全能と思われる力にいどむこと。
このような行為が、
善となり、偉大で愉しく、
美しく自由にさせるのである。
これこそ人生であり、歡喜、
絶対的主権および勝利なのである。

シェリー『縛られたプロメテウス』

II Scherzo

There go the ships,
and there is that Leviathan:
whom thou hast made
to take his pastime therein.

Psalm 104

第2楽章 スケルツォ

そこに舟が走り、
あなたが創られた鯨（レビヤタン）は、
そのなかで
たわむれる。

『旧約聖書』『詩篇』第104番

III Landscape

Ye ice-falls! ye that from the mountain's brow
Adown enormous ravines slope amain—
Torrents, methinks, that heard a mighty voice,
And stopped at once
amid their maddest plunge!
Motionless torrents! silent cataracts!

Coleridge: *Hymn before Sun-rise,
in the Vale of Chamouni*

第3楽章 風景

氷がくずれ落ちる！ 山の端から
大きいなる渓谷をまっしぐらに流れ落ちる——
急流はある偉大な声を聞いて、
ただちに物狂わしいほどの落下を
止めたように思われる。
不動の急流！ 静かな瀑布よ！

コールリッジ
『シャモニーの谷の日の出前の讃歌』

IV Intermezzo

Love, all alike, no season knows, nor clime,
Nor hours, days, months,
which are the rags of time.

Donne: *The Sun Rising*

第4楽章 間奏曲

恋には、すべて、季節もなければ、気候もない。
時刻もなければ、日や月もない。
こういうものは、時のぼろ（懐襷）にすぎない。

ダン『昇る陽』

V Epilogue

I do not regret this journey...
We took risks,
we knew we took them;
things have come out against us,
and therefore
we have no cause for complaint.

Captain Scott's last journal

第5楽章 エピローグ

私はこの旅を後悔していない。
われわれは危険をおかした。
また、危険をおかしたことを自覚している。
事態はわれわれの意図に反することになってしまった。
それゆえ、われわれには
泣きごとをいういわれはないのだ。

『スコット大佐最後の日記』

訳／三浦淳史



5 / 31

KOIZUMI Kazuhiro

Honorary Conductor for Life

終身名誉指揮者 小泉和裕

東京藝術大学を経てベルリン芸術大学に学ぶ。1973年カラヤン国際指揮者コンクール第1位。ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、シカゴ響などに客演。新日本フィル音楽監督、ウィニペグ響音楽監督、都響指揮者／首席指揮者／首席客演指揮者／レジデント・コンダクター、九響首席指揮者、日本センチュリー響首席客演指揮者／首席指揮者／音楽監督などを歴任。現在、都響終身名誉指揮者、九響音楽監督、名古屋フィル音楽監督、仙台フィル首席客演指揮者、神奈川フィル特別客演指揮者を務めている。

Kazuhiro Koizumi studied at Tokyo University of the Arts and at Universität der Künste Berlin. After winning the 1st prize at Karajan International Conducting Competition in 1973, he has appeared with Berliner Philharmoniker, Wiener Philharmoniker, among others. Currently, he serves as Honorary Conductor for Life of TMSO, Music Director of Kyushu Symphony, Music Director of Nagoya Philharmonic, Principal Guest Conductor of Sendai Philharmonic, and Special Guest Conductor of Kanagawa Philharmonic.



第833回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.833 A Series

Series

東京文化会館

2017年5月31日(水) 19:00開演

Wed. 31 May 2017, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● 小泉和裕 KOIZUMI Kazuhiro, Conductor

ピアノ ● アブデル・ラーマン・エル=バシヤ Abdel Rahman EL BACHA, Piano

コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

ベートーヴェン：

ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 op.73 《皇帝》 (38分)

Beethoven: Piano Concerto No.5 in E-flat major, op.73, "Emperor"

I Allegro

II Adagio un poco mosso

III Rondo. Allegro

休憩 / Intermission (20分)

シューマン：交響曲第2番 ハ長調 op.61 (38分)

Schumann: Symphony No.2 in C major, op.61

I Sostenuto assai - Allegro ma non troppo

II Scherzo. Allegro vivace

III Adagio espressivo

IV Allegro molto vivace

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金

(舞台芸術創造活動活性化事業)



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。

写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Piano

Abdel Rahman EL BACHA

ピアノ

アブデル・ラーマン・エル=バシャ

©Alix Laveau



1958年ベイルート生まれ。パリ国立高等音楽院で学び、4科で首席卒業。1978年（19歳）、エリーザベト王妃コンクールで審査員全員一致による優勝、あわせて聴衆賞を受賞。フランス政府より芸術・文芸シュヴァリエ賞、レバノン大統領より功労賞の最高位メダルを授与された。エリーザベト及びジュネーヴ国際音楽コンクールの審査員、エリーザベト王妃音楽院ピアノ科教授。優れたテクニックに支えられた、威厳に満ち、明快でしかも静穩な演奏は各地で絶賛を博している。

Abdel Rahman El Bacha was the 1st Prize and Audience Prize winner at Queen Elisabeth Competition in 1978 when he was only 19 years old. He was born in Beirut in 1958. Graduated from Conservatoire national supérieur de musique et de danse de Paris with four 1st Prizes. Acknowledging his longtime achievement, the President of the Republic of Lebanon awarded him the "Medaille de l'Ordre du Merite", the highest distinction of his native country.

ベートーヴェン： ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 op.73《皇帝》

《皇帝》という言葉はルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)自身に由来するものではなく、後世の人間が与えた愛称だが、晴れやかにして雄渾で、構えも大きい音楽のたたずまいは、他のいかなるピアノ協奏曲をさしあいても、この作品へ与えられるにふさわしい。着手を見たのは1809年前半と推察されているが、当時のウィーンはナポレオン軍の侵攻にさらされて大混乱に陥っていた。7月にベートーヴェンがライプツィヒの楽譜商ヘルテルへ送った手紙の中で「作曲の筆など進みません。聞こえるのは大砲と太鼓の音ばかり……。ありとあらゆる惨事が人々にふりかかっています」と記しているとおりである。ちなみに彼の恩師にあたるヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)が、砲撃にさらされる街の中で息をひきとったのは5月31のことだった。

フランス軍との講和が成立した秋以降になると、ベートーヴェンも平静を取り戻して仕事机に向かい、年内もしくは翌年の春ごろに《皇帝》が完成に至る。こうした経緯からもたらされた、外敵の脅威をはねのけんとする内的衝動が作品の性格に影響を及ぼしているとするのはあながち不当な見方ではないだろう。変ホ長調という調性も(一度はナポレオンに捧げる意図を持って書かれた《英雄》交響曲と同じだ)、霸氣と充足感を伴うヒロイックなイメージを喚起してやまない。

ベートーヴェンは通し番号で全5曲のピアノ協奏曲を残したが、そのうち彼が自分でソロを弾いて初演しなかったのは、この第5番のみである。耳の病による難聴の進行により、独奏者としての出演が無理になっていたのが理由のひとつ。そしてこれを最後として、彼はピアノばかりか他の楽器のための協奏曲にも二度と手を染めることはなかった。ソリストとオーケストラが一体となって“シンフォニック”な世界をおりなす楽曲構成法は既にピアノ協奏曲第3番や第4番でも追求されていたことだが、その方向性を突き詰めた《皇帝》によって、ベートーヴェンはコンチェルトという形式にひとつの到達点を刻んだといえるだろう。

第1楽章(アレグロ)は、全管弦楽によるフォルテシモの和音と、独奏ピアノが弾ぐアルペッジオと音階走句からなる華麗なパッセージの交替によって始まる。第4番でも冒頭にピアノのソロを配するという斬新な手法をとっていたベートーヴェンだが、これはさらに大胆な着想だ。続く楽章主部でも、ソリストの技巧を発露させる楽句が常に音楽の有機的展開と結びついている点が大きな特色。第2主題部で活躍する2本のホルンをはじめとして、オーケストラも聴きどころ満載である。

なお、通常ならコーダに入る前の箇所で独奏楽器のみによるカデンツァが演奏されるところだが、「カデンツァは不要。先へ進むこと」とわざわざベートーヴェンは書きつけ、曲の進行を中断させたくないという意志を強固に表明している。

口長調の第2楽章(アーデージョ・ウン・ポーコ・モッソ)は憧れと慰めに満ちたひと時。第1楽章の主音の“変ホ”を“嬰ニ”と読み替えれば、そこから長3度下の調性へ転じたことになり、こうした3度の関係性を対比感も豊かに生かす手法をベートーヴェンは好んで用いた。中間部で装飾性に富む楽句を弾き連ねたピアノがやがて主題を回帰させ、それを木管楽器が受け継ぐやりはことさらに印象深い。

第3楽章(ロンド/アレグロ)は、第2楽章のコーダでピアノがそのテーマを暗示する部分から切れ目なく流れ込む形で始まる。ダイナミックな主要主題と、リズムのあしらいに妙のある副主題部が交錯しながら進み、その過程を彩る転調も絶妙。コーダに先立つ箇所で、息を少しずつ鎮めていくピアノとティンパニが交わす対話もベートーヴェンらしい筆使いだ。

(木幡一誠)

作曲年代：1809(～1810)年

初演：1811年11月28日 ライプツィヒ
ヨハン・フリードリヒ・シュナイダー独奏 ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、
ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

シユーマン： 交響曲第2番 ハ長調 op.61

ローベルト・シユーマン(1810～56)は1844年末にライプツィヒからドレスデンへ移住した。転居にはその少し前からの精神的不調を治す目的があった。実際、症状はやがて好転し、創作意欲も少しずつ戻って交響曲の構想をするまでになる。しかし、それでもまだ不安定な状態にあった彼は、創造上の靈感を受けながらも[1845年9月のフェリックス・メンデルスゾーン(1809～47)宛の手紙で「頭にはティンパニとトランペットが大きく響いている」と述べている]、本格的な作曲には取り掛かれてなかった。

1845年12月初めにシユーベルトのハ長調交響曲の再演を聴いたことも一つのきっかけとなって、そうした靈感が一挙に形になるかのように、年末までに全楽章のスケッチを書き上げる。しかしそこからまたオーケストレーションに苦労し、やっと1846年10月に交響曲第2番は完成、推敲を経て11月5日にメンデルスゾーンの指

揮で初演され、その後の改訂を経て決定稿ができあがった。

こうした不安定な状態との闘いと苦惱の末に完成されたこの作品について、シューマン自身「私はこの曲を半ば病いの状態で書いた。作品を聴けばそのことは明らかだろう。やっと終楽章で自分を取り戻し始めた感じになり、実際作品が完成したあと元気を回復した」と述べている。

たしかに最初の3つの楽章には、そうした苦惱のあとを読み取ることができよう。第1楽章にしても、明るいはずの長調をとりながらそこにはどこか錯綜した響きがつきまとい、あたかも明るさを求めてもがいているかのように、晴れわたることがない。そうした苦惱に満ちた最初の3つの楽章からふっきれたような終楽章へ至る構図のうちに、自身の内面感情の闘いを表した、いかにもロマン主義者シューマンらしい交響曲である。

第1楽章 ソステヌート・アッサイ～アレグロ・マ・ノン・トロッポ 序奏冒頭のファンファーレは曲全体に重要な役割を果たすモットー動機である。主部は活気はあるが、落ち着かない動きが感情の葛藤を映し出す。

第2楽章 スケルツオ／アレグロ・ヴィヴァーチェ やはり落ち着きのない無窮動風の動きが支配するスケルツオ。

第3楽章 アダージョ・エスプレッシーヴォ ハ短調の暗い叙情に支配された緩徐楽章。その主要主題はJ.S.バッハの《音楽の捧げ物》のトリオ・ソナタから取られている。

第4楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ 勝利感溢れる第1主題と、第3楽章の主題に基づく第2主題とによってソナタ形式の手順で進行していくが、展開部の途中で新しい大らかな主題(ベートーヴェンの歌曲集《はるかな恋人に》第6曲「受けたまえこの歌を」に基づくとの説が有力)が示されるや、ソナタ形式としての進行は打ち切られ、以後はこの新主題を中心に明るく高揚、曲頭のモットー動機とも結び付きながら勝利を謳歌してゆく。

(寺西基之)

作曲年代：1845～46年

初 演：1846年11月5日 ライプツィヒ

フェリックス・メンデルスゾーン指揮 ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部